文化

なら民俗通信　299

西村　博美

大和の大和の源九郎はん
狐は田の神信仰の表象

▼源九郎はん遊び

新型コロナウイルスがもたらしたわざわいの、気楽な外出もままならない日々に、思わぬ恵みのような本に出合うこともある。東洋文庫の『日本児童遊戯集』（原著、大田才次郎編『日本全国児童遊戯法』）は、子どもの遊びの数々を収載しており、挿絵も豊富で楽しい。例えば、【大阪】の項に「源九郎はん遊び」を載せている。

今でいう鬼ごっこの一つだろうが、その唱え文句がまた愉快で、こんなふうにある。

「大和の大和の源九郎はん、お遊（あす）び／今、寝てます／そうだっか」「大和の大和の源九郎はん、お遊び／今、寝間（ねま）あげてます／そうだっか」「……今、手水（ちょうず）つこうてます」「……お膳出してます」「……御飯たべてます」という子どもどうしのやり取りが、後段になって、

「何のおかずで／蛇のおかずで／生きたんか死んだんか／生きたんや」と急展開すると、鬼役の子どもは大声をあげて多くの子どもを追い回し、これを捕らえる。どうしてここで唐突に蛇が出てくるのか、驚きでしかないが、真意のほどは不明である。

▼源九郎稲荷神社

大阪の子どもたちが唱えて遊んだ「源九郎はん」は、大和郡山市洞泉寺町に、源九郎稲荷神社として祀られていて、民俗研究者の小島千夫也に「大和郡山城下の子供遊び」という報告がある（『民俗芸術』第三巻一〇号）。

「源九郎はん、遊（あす）びまほうか」とやって来る大勢の子どもと、「今寝てらりまんねん」「着物着てらりまんねん／何食べてはりまんねん／蛇（クツナ）と蚯蚓（メメズ）のさい［オカズ］で／わしも一膳（イッチエン）よんどくれ」などという問答があって、子どもの大勢は「一べん此処（ここ）通しとくれ」と言った後で、「畑踏んだ畑踏んだ」と叫びながら逃げて行く。この町からそう遠くない同じ大和の地に生まれ育った筆者などにとっては、「〇〇らりまんねん／はりまんねん」「顔あろてらりまんねん」「鼻かんでらりまんねん」といういわば「焦（じ）らせ役」の子どもとのやり取りは、大阪のそれとよく似ている。お終いに、「今ごはん食べてはりまんねん」「畑踏んだ」と逃げていくさまの不可解さも、ちょっと理屈では説明しがたい。

源九郎稲荷神社＝大和郡山市洞泉寺町

▼おこんさん

大阪や大和から遠く離れた長野県の佐久平地方に、「おこんさん、おこんさん、遊びにお出で／おこんはまだ寝てるぜ／まあ寝坊だいな」と歌う遊び歌が残っている（小山真夫編『小県郡民謡集』郷土研究社）。

同じく長野県の上伊那のあたりでも「山越え川越えて澤屋のおこんさ、あんびにおいで［おこんさん遊びにおいで］／今、顔を洗っとるに／おお、寝坊ねーぼ」「今ご飯食べとるに／大食い小食い」などと言って、「おこん」役の子どもを川まで誘ったあとで逃げる（田畑邦夫『民俗芸術』三巻九号）。

また、福島県の信夫郡地方にも「山越えで、川越えで、コンコン様居（いだがい居だぞい、何してだい／（狐）今流しで骨かじってた／（詞）ウワーいやしこ、いやしこ」食いたがりだな」などと言って遊ぶ「からかい鬼の唄」が残る（町田嘉章他編『わらべうた』岩波文庫）。

柳田国男は、一人の鬼をオコンサン、すなわち狐と呼んで遊ぶ筋書きには、「こどもでなくてはいえぬようなおかしい問答が数多くくりかえされる」と述べている（「狐あそび」『こども風土記』角川文庫）。

という言葉もまた懐かしく、いっそう親しみがわいてくる。

国語学者の金田一春彦は、「わらべうた」に触れて、多くの歌が問答形式に展開していく一方で、「終わりは煙のように」さっぱりわからないというのが少なくないと言っている（『童謡・唱歌の世界』主婦の友社）。ここに引いた「源九郎はん遊び」のヘビやミミズが「おかず」であったり、「畑踏んだ」と逃げていくさまの不可解さも、ちょっと理屈では説明しがたい。

▼狐と子どもと信仰

このように各地に残る「わらべうた」のなかの狐と子どもの親しい関係は、もともと信仰に根ざしたものである。柳田国男は、『日本の祭』のところで、「静岡県西部の村々では、オコンコンサマというのがあった。……霜月十五日の地神の祭の日で、やはり彼等が狐の真似をして、御供物の赤飯や大根膾（なます）などを貰って食べるのである」としている。

狐は、春の耕作はじめに迎え、秋の収穫おわりに送るという田の神信仰の表象であったと考えられる。狐の塚は、山と人里の境界にあって、木の茂みに営まれ、土壇にはヘビもミミズも一緒に住んだのだろう。

わたしたちは、またこんな歌も知っている。「こんこんこぎつね、あぶら買い、いそぎの野みちは、お寺うら、町のあぶら屋、つきあたり……かえりの野みちは、六日月、さやさやすすきに、風がふく、こんこんこぎつね、さむそうな、……」（浜田広介、『日本童謡集』岩波文庫所収）。

民俗学者の岩井宏實によれば、昔は、寒中の午（うま）の日の夜を待って、大和の源九郎稲荷さんへと、近在の人々は子どもを連れて、「寒施行寒施行」と言いながら、握り飯や魚の油揚げなどを供えに参ったという（『奈良県史』民俗篇・下巻）。大和の大和の源九郎はん、あしたも遊んでくだはいな。

（にしむら・ひろみ＝詩人、奈良民俗文化研究所研究員）

＝次回は9月4日付＝